

Go Down, Moses 考

—「姿を消したが消滅してはいない」過去との絆—

寺沢みづほ

1

Go Down, Moses (1942) は、William Faulkner の創作活動の大きな転機を示す作品である。読者に理解されることを全く当てにせずに (Gwynn and Blotner 14, Meriwether and Millgate 233), 彼独自の斬新な手法を駆使して、傑作を次々に生み出していた1930年代は、Faulknerにとって想像力も体力も最高に充実していた30歳代の時期であった。世界文学全体を見渡しても、これほど立て続けに最高級の作品を生み出し続けた例は、極めて稀である。しかし、読者の理解を当てにしていなかったため、これほどの傑作を生み出しながらも、その時代においては全く理解されず、出版した作品は殆ど、初版かぎりでは絶版になっていた。

しかし1942年の*Go Down, Moses*以後、この状況が劇的に変わった。アメリカ最高レベルの文学的知性と感性の持ち主で、critic, scholar, poet, editorであるMalcolm Cowleyが、Faulknerの傑出した才能に気づき、その文学的特質を一般読者に知らしめるべく、Faulknerの様々な作品——長編の一部や短編——を編纂して、1946年に*The Portable Faulkner*として出版した。Faulknerが描いてきた深南部の年代記的小説群the Yoknapatawpha Sagaの概略を示すことを目的に編纂されたこのanthologyには、当時出版されたばかりだった*Go Down, Moses*から3つのstoriesが収録されている。このたった1冊の本が、文学界の認識を完全に転覆させた。それまでずっと無名状況の中で15年以上創作を続けてきたFaulknerは、またたく間にアメリカと世界から最高の評価と注目を与えられる作家になり、*The Portable Faulkner*出版からわずか3年後の1949年には、ノーベル文学賞を受賞するまでになってしまった。突然に有名人になってしまった、南部の作家Faulknerに対し、文学研究者もマスメディアも、人種差別問題で激しく混乱していた当時の南部のスーパースタンの役割を一方向的に期待し、託宣を聞かせてもらえるものと決め込んでいた¹。「読者の理解を当てにしない」とは、非常に独創的な手法を駆使することのみならず、それ以上に、常識的な社会通念にへつらわない独自の価値観に立った物語を構築することでもある。1930年代に南部の過去に関心を集中させる物語を創作する中では、現在の政治問題や、例えばthe Great Depressionをはじめとする当時の現実問題への言及などをするのはほぼ皆無であった。そのようなFaulknerが、

突然に現実の社会問題や政治問題に対する姿勢を公的に問われる羽目になったのである。このような社会的な立場の変化だけが原因ではないが、1940年代からの Faulkner の作風は明らかに「現代」「現実問題」を取りこもうとする方向に変化しているし、そのような転換をした後期の作品が、1930年代の傑作群と比べると魅力が落ちるということでは、大半の人の意見が一致している。Go Down, Moses はこの変化の境界線上の作品であるし、作風転換の兆候の一つであるが、従来の作品群ではドラマの背景にすぎなかった黒人たちを主役の地位に据える3つの stories が初めて出されている。本論で解明するのは、Go Down, Moses の中心をなす神話と歴史認識の stories で前面に出されている抽象観念の意味を解明すること、およびその抽象観念と、黒人を主人公とする stories の意味との深い関連を明らかにすることである。私が指摘するような一貫した作品の意味を見出しているわけではないが、Cleanth Brooks は “Go Down, Moses has a great deal more over-all unity than a superficial glance might suggest” (244) と直感的に気付いている。

Go Down, Moses の中心に据えられている、名作との誉れが高い2つの stories, “The Old People” と “The Bear” は、難解に見える抽象概念を多用する神話になっている。例えば、“The Bear” の第4章で、「土地は本来誰のものでもない」という考えが、絶対的な真理として打ち出される。「大空は誰のものでもない」「海洋は誰のものでもない」というような言い方と並べて、「大地 (earth, land) は誰のものでもない」という way of speaking は確かに存在しているし、それはある抽象的な局面においては意味を持つ。しかし、個人としての生活、家族、共同体、国家、文明などを成立させるためには、必ず公共の土地と私有の土地の両方がなければならないことは、今更言うまでもない。そもそも質素な古い館であれ、それを買って自分で修繕し、館を Rowan Oak と名付けて生涯そこに暮らした Faulkner, 気晴らしのために弟たちと共同名義で買った農場 the Greenfield Farm でラバを飼育していた Faulkner が、まともに土地私有制度を否定していたはずがない。しかし、“The Bear” の中心議論の中で、「土地は誰のものでもなく、個人が土地を売買したり、子孫に譲渡したりしてはならぬもの」という観念がまともに打ち出され、この厳格な基準によって南部の過去が一旦は厳しく断罪される。次に引用する文は、1888年に語っている Isaac McCaslin の亡き祖父が、インディアンの酋長 Ikkemotubbe から、売買してはならぬ土地を売買した意味——売買できると思った途端に所有権を失うという逆説——について語り、さらに「神意」までもちだして、土地売買の過ちの重大性を強調する、作品の基盤となる思想を示すものである。

‘Because it was never Ikkemotubbe’s father’s father’s to bequeath Ikkemotubbe to sell to Grandfather or any man because on the instant when Ikkemotubbe discovered, realized, that he could sell it for money, on the instant it ceased ever to have been his forever, father to father to father, and the man who bought it bought nothing.’

‘Bought nothing?’ and he

‘Bought nothing. Because He [God]...made the earth...and then He created man to be His overseer on the earth...to hold the earth mutual and intact in the communal anonymity of broth-

erhood, and all the fee He asked was pity and humility and sufferance and endurance and the sweat of his face for bread.’ (246)²

過去の南部の過ちを断罪する第一歩としてこの厳格な基準を打ち出すが、この基準に照らす限り、神意に背いたのは南部ばかりではなく、旧世界もアメリカ北部も含めたすべての人間文明社会が失格になる。このことを示すように、テキストでは上記の引用部分の直後に、旧南部の悪弊である奴隷制度が南部だけのものではなく、人類史の発生時点から人間文明に必然的に付随してきた悪弊であると語られている。このように、南部の特殊な問題をテーマに始まった議論は、厳格な基準の適用によって、そのまま古代以来の人類史全般にわたる文明の悪の問題議論へと転化する。人類発生の時点まで視野に入れた時間のスパンの拡大によって、作品は神話的な様相を帯び、またそれによって必然的に南部固有の問題性は薄められ、不可視になっていく。南部の過去を厳格すぎる基準で断罪していたはずの議論が、いつの間にか南部を擁護する議論に移行して行くのであるが、非常に明白なこの特徴が、現在に至るまでに批評で見落とされ、Faulknerが旧南部社会を否定しているはずという想定だけで論じられ続けている。そもそも、神を持ちだして、現状のありようの中に神の意思を読み取ろうとする態度は、必然的に現状の肯定になるという最も基本的な事実さえも、従来の批評において指摘されたことは一度もない。

人類史の当初からを関心の対象として抽象的に論じるという *Go Down, Moses* のやり方は、以後の作品（例えば *Requiem for a Nun*）ではさらに突き詰められて、人類発生以前の何億年以前の古生代まで時間的スパンを広げるなどの形で繰り返されるようになる。こうした抽象的な概念が過剰になる Faulkner 後期の世界が、1930年代を中心とした傑作時代の作品と具体的にどのように違うのかを明らかにし、そしてこの作業を通じて Faulkner 作品の豊饒さの鍵が何であるのかも明らかにしていきたい。

先ほど述べたように、“The Bear”で打ち出される神話の抽象観念——究極的には旧南部の弁明——と、黒人を主人公とする stories とは、不可分に繋がっているものであり、黒人を主人公にした物語の意味も、神話の抽象観念に照らさなければ理解できないという質のものである。しかし、従来の批評でこのことに気付いて論じたものは無いようである。従来の批評では、黒人を主人公とする物語に関しては、「黒人」「女性」の登場人物を「普遍的な humanism という真理の体現者」として無条件に絶賛し、それから外れる存在を「普遍的な anti-humanism」として非難するという態度を今もって繰り返すばかりである³。

具体例で、従来の批評と私の批評の大きな違いを示す。*Go Down, Moses* の最後に、黒人老婆を主人公とする、全体の4%程度の量の短い物語“Go Down, Moses”が置かれている。この老婆の苦境は孫息子に関するものである。黒人の少年（老婆の孫）は、凶暴な犯罪者にして殺人者である彼の父親が黒人娘にこの少年を孕ませておきながら捨てて逃げたし、若い母親も出産時に死去しているので、母親の両親である祖父母が孫息子を引き取って育てていた⁴。しかし少年は子供時代から手が付けられない矯正不能な悪童で、祖父母が働き暮らす農場内でも break into the commissary

storeなどを繰り返しており、白人農場主は少年を農場から追い出す。農場から南部の田舎町、さらには大都会 Chicago へと流れた少年は、重大な犯罪を重ね続け、やがて警官を殺した罪で26歳の若さで死刑になるのだが、彼は自分の死にも他人の死にも無関心という人間精神の欠陥を抱えたまま人生を終える。しかし凶暴な犯罪者であっても、祖母にとってはかけがえのない孫であり、彼女は孫の亡骸を引き取って立派な葬儀を出す。

分かりにくいのがこの先である。黒人の祖母は、聖書の中の出来事と自分の家族に起こったことを仕分けなく混同し、白人農場主が孫を「奴隷に売ってしまった」と非難する筋の通らない言葉を、黒人霊歌の歌詞と響き合うように繰り返す。勿論、黒人少年の更生の可能性などという問題は、この小説には全く考慮に入っていない。あなたがこの農場主の立場であったなら、矯正不能な犯罪者を自分が管轄する区域から外に出すことが、それほどに非難すべき絶対的、かつ普遍的な inhumanity だと思うだろうか？ 現在までの文芸批評が言っていることは、まさにこうした意味付けだけである。一方、私は、この小説で展開される特殊な歴史解釈——抽象観念——の基準に立って初めて、いかに極悪な犯罪者であっても、この白人農場主に限って絶対に放逐してはならなかったという特殊な理由が初めて見えてくると主張する。こうした批評観の違いについてはさらに後述するとして、現在の批評に顕著な、自分を humanism だと決めつけて、その立場からのみ意味づける人々に対しては、南部の実情に無理解なまま、自分たちを正義の権化だと頭から信じ込んで、道義的な告発文を書く趣味を持つ北部の自称良識者、“the mellifluous choring of self-styled men of God” (275) への嫌悪感を作中ではっきり示している Faulkner も、同じ気持ちであると思う。

2

具体的な議論に入る前に、この作品の特殊な形態について概説し、特有の扱いにくさを見ておかねばならない。7つの、それぞれに独立した題名が付けられている episodic stories で構成されているこの作品は、作者が繰り返して「一つの長編小説」だと主張しているが、長編としては一貫性がなさすぎ、短編集としては繋がりがあまり過ぎるように見える厄介なしろものである。雑誌に短編として発表していたものを、書きなおしを加えながら繋ぎ合わせて長編小説にするというこの作品の作り方自体は、従来も *The Unvanquished* (1938)、*The Hamlet* (1940) などにおいて採用していた手法であり、珍しいわけではないが、しかし同じ手法で作られた他の作品にははっきり存在している長編小説としての一貫性が、*Go Down, Moses* においては非常に見つけにくい。舞台となる時代も1859年から1940年あたりまでの長期間のうちのどこかの一点であり、そこに存在した様々な人の（全体に照らせば）断片的としか見えない物語が chronology を無視して配置されているのである。

大枠での一貫性じみたものも確かに存在はしており、おおむね、antebellum plantation owner/slaveholder であった Carothers McCaslin の白人系の子孫と黒人系の子孫の物語である。白人子孫と黒人子孫が共通の白人の先祖を持つのは、この先祖である Carothers が白人の妻との間に子

をなしながら、一方で黒人奴隷女にも子供を産ませ、さらに屈折したことには、その黒人奴隷女に産ませた実の娘との間でも incest を犯して子供をもうけているからである（なぜ Faulkner が白黒の混血児の状態だけで済まらずに、incest までも加えた設定にしているかは、後述する）。白人子孫の直系（男子系）の McCaslin 家，白人子孫の傍系（女子系）の Edmonds 家，黒人子孫の Beauchamp 家，立場も時代も異なるこれらの人々の断片的な物語が、トーンも異なるし、時には相互矛盾する形で提示される。最初の2つは牧歌的、Tall tale 的で滑稽な物語である。中核となる Isaac McCaslin 少年を主人公とする大森林を舞台にした2つの物語は神話であり、そして最後の2つの物語で、それまでの神話世界から突然に現代の現実世界に移行する。これら多様で断片的な局面の全部を過不足なく論じたら、論文がバラバラになりかねないという危惧を批評家は抱くことになるし、それゆえに、一部だけを取り上げて、それに political correctness の図式を当てはめる安直さに逃げたくなる気持ちも分からない訳ではない。

しかし、その外見上の繋がりのなさの下に、一貫した繋がりが底流している。それを3番目の物語“Pantaloone in Black”に言及しながら見つけてみよう。これは一番扱いにくい物語である。前述のように、他の6つの物語は少なくとも血縁関係に結ばれた人々の物語であるのに、この物語には血縁さえもないのだが、実はこの遊離した物語の中に、全体を貫くテーマが明示されている。黒人版の Orpheus and Eurydice 物語と言えるこの短編は、超人的な力持ちである黒人の若者 Rider が、妻 Mannie の棺を取めた墓穴に猛烈な勢いで土をかぶせている場面から始まる。新婚6カ月目に急逝した妻との結婚生活は幸事に満ちたものだったが、それが突然に断ち切られたところから始まるこの物語は「失樂園」物語であり、夫が埋葬作業に没頭するのも絶望の深さのためである。妻の肉体は大地に埋められて不在になっただけでも、そのことが信じ難いほどに彼女が存在した痕跡は vivid である——埋葬作業をしている夫が身につけている作業着も数日前に妻が洗濯してくれたものだし、家の周りのぬかるみには、つい先日妻が付けた裸足の足跡が未だくっきり残っており、夫にとって、焦がれている妻は“vanished but not gone” (133) の状態にある。これを証明するかのよう、妻を激しく求める夫の前に、妻は apparition として姿を現す。失われた楽園回復悲願を象徴する phrase “vanished but not gone” は、そのまま中心となる2つの神話物語“The Old People”と“The Bear”のテーマの要約になる⁵。だからこそ、2つの神話物語の直前に、全く異質に見える“Pantaloone in Black”をあえて配置し、次に展開される同じテーマの予告をしている。

本論の論述は以下の順序で進めたい。まず次の第3章で、Go Down, Moses に至る以前の、Faulkner が30歳代に書いた、具象性に支えられた傑作群の特質を見て、この特質と、後期作品に顕著になる抽象的な観念の多用の違いについて概観してみる。第4章では、Go Down, Moses のクライマックスになる2つの神話的な物語を分析し、神話性や歴史認識の抽象性の意味を明らかにする。次の第5章では、神話的な物語の前後に配置された、4つの黒人子孫に関連する物語を分析し、神話的な物語の抽象観念と不可分になっている、人種問題に関わる抽象観念の意味を明らかにする。最後の第6章で、Faulkner の作風転換の意味について、さらに考える。

3

1955年のインタビューで、Faulknerは、彼の豊饒な創作母体となる the Yoknapatawpha world の発見について、以下のような発言をしている。

Beginning with *Sartoris* I discovered that my own little postage stamp of native soil was worth writing about and that I would never live long enough to exhaust it, and by sublimating the actual into the apocryphal I would have complete liberty to use whatever talent I might have to its absolute top. It opened up a gold mine of my peoples, so I created a cosmos of my own.... There is no such thing as *was* — only *is*. If *was* existed there would be no grief or sorrow. (Meriwether and Millgate 255, italics original)

Faulknerが初めて創作母体を発見した作品は *Flags in the Dust* であったが、これは少なくとも6つに分けられるべき小説で、それを一つの作品に詰め込んだため散漫になり過ぎているという理由で、原稿を読んだすべての出版社から出版を断られ、ついにFaulknerの友人のBen Wassonが全体の四分の一をカットして、*Sartoris* という題名に変更してようやく1929年に出版にこぎつけた。もとの *Flags in the Dust* はFaulknerの死から11年後の1973年になって初めて出版された。「過去と現在とは一体不可分に繋がっているもので、過去と断ち切られた現在などない、もしそれがあるとすれば人間精神が減じる時である」というこの引用内容にも明らかなように、時間の連続性と過去の不滅性は、the Yoknapatawpha Saga 全体を貫くテーマになっている。しかし、*Flags in the Dust* (*Sartoris*) は、まだFaulknerの資質が十全に発揮されてない凡庸さの段階に留まっていて、それが十全に開花するのは、Faulkner自身が“the one [work] that I anguished the most over, that I worked the hardest at” (Gwynn and Blotner 61) と自認する *The Sound and the Fury* (1929) である。この2作は相次いで書かれたのだが、才能の発揮という面では非常に大きな飛躍が果たされた。傑作期の特質を明らかにするために、*Flags in the Dust* (傑作期の直前) と、傑作を代表する *The Sound and the Fury* と、その段階から抜け出しかけている *Go Down, Moses* の3作を並べてみると、そこで目につく最大の違いが、時間の悲劇性と不可分になった、小説の中心となる魅力的な女性像の有無であることに気付く。Faulknerの三大傑作—— *The Sound and the Fury*, *Light in August*, *Absalom, Absalom!* ——それに *Sanctuary* の詳細な分析を通して、Faulkner文学の核となるのが、処女膜幻想であるという説を、私はすでに拙論 *The Rape of the Nation and the Hymen Fantasy*⁶ で詳しく論証しており、また同じ時期の *As I Lay Dying* と *The Hamlet* においても、同一の hymen fantasy が作品の核心になっていることを、私はすでに論じているが、傑作期の30年代の hymen fantasy を、その前後の時期と関わらせながら、意味を要約してみよう。

私が提唱している the hymen fantasy とは、Faulknerの独自の想像力の型、創作の型を指す。若いヒロインの処女膜に、あるべき秩序、愛情深い人間関係、安寧、誇りなどすべての望ましい価値観(楽園状態)を結び付け、その魅力的な女性を愛する男たちは、女の処女膜を固守しようと必

死の努力をするが、時間の影響を被る女性の肉体は否応なく成熟期を迎え、女性が性の世界に入り込むことを男たちはどうしても防げない。このように、時間の動きという Faulkner の悲劇的な *obsession* を、女性の肉体のエロスという具象物に結び付けることで、抽象的な時間のドラマと具体的な人間悲劇のドラマを見事に一体化させて、迫力ある物語に仕立てることができる。三大傑作の時代は、*the hymen fantasy* が顕著に出ているが、*Flags in the Dust* と *Go Down, Moses* にはそれが、それぞれ異なる原因で欠落している。まず *Flags in the Dust* の方から見てみよう。

Flags in the Dust において、南部の名門 Sartoris 家は天寿を全うした男が一人もいない家系である。南北戦争で、戦局的には全く無意味な無謀な行動をして 22 歳で戦死した先祖が、20 世紀に生きる子孫の若者の運命も支配しており、若者は激しく死ぬことだけを遂行するために生き、27 歳で無謀で無意味な死を遂げる。原点となる南北戦争時の先祖の死を、何にも貢献しない無意味な死に設定してある理由を私は次のように推測する。南北戦争が南部の敗北に終わる以上、ある局面で何かに貢献する死であったと仮定してもそれが勝利に結びつかない「悔しさ」で汚染されるのだから、むしろ一瞬の閃きのような何物をも目的としない英雄伝説化されるような死を果たすことで、子孫や共同体の記憶の中で長く生き続け、時間の破壊力を嘲笑う行為に出来るということであろう。しかし、そこまで作者の意図を好意的に解釈したとしても、この小説で描かれる過去の南北戦争時の死も、過去による支配の中で起こる現在の死も、共に共感しかねる凶暴な愚行としか思われまいし、さらに無意味である過去の死が、なぜ半世紀余を隔てた子孫の若者を死に駆り立てるかという繋がりが、全く説得力がない。つまり Faulkner にとって最も肝要なテーマである、過去と現在の繋がりを描きそこなっているのである。この失敗の最大の要因は、過去と現在をつなげる具象としての女性像にまだ行きついていないからであり、この小説に出てくる若い女性 Narcissa は、過去と現在をつなぐ役割も負わされず、愛情深くもなければ魅力も乏しく、周囲の男に命を賭けて愛される質を全く持たされておらず、意義も印象も薄い存在でしかない。

過去と現在の断ち切りがたい繋がりというテーマを見出しはしたが、それを説得力を持って表現する術を掴んでいなかった *Flags in the Dust* の段階から、*The Sound and the Fury* という傑作の段階に飛躍する契機になったのは、中心となる女性像——泥だらけのズロースを履いて木に登っている女の子 Caddy——であり、また彼女のズロースを下から見上げている彼女の 3 人の *brothers* のイメージである。幼い Caddy のズロースの汚れは、後に成熟した肉体を持つ十代の娘になった時に彼女が被ってしまう性的な汚れを予告する。そして、彼女の性的な汚れは、この名門一家が、もしくは社会の秩序や安寧が、完全に崩壊するか否かの鍵となっているのであり、彼女の兄弟たちは、彼女を強く愛したり、彼女の変化を強く嘆いたり、また憎んだりしており、この小説の激しい人間ドラマは完全に Caddy への強い関心を軸にして展開している。そして Caddy は、恐れを知らずに人生にチャレンジする勇敢さ（無謀さと）、弟や兄をいたわって思いやる深い愛情——肉体的な魅力のみならず、深い精神性——の持ち主である。さらに、まだ成熟しきっていないが性に目覚めかけた彼女の体は強烈なエロスの魅力と破壊力を備えている。Faulkner がインタビューで要約して

いる、白痴の弟 Benjy にとっての Caddy の存在の意味を聞いてみよう。

He himself didn't know what he was seeing. That the only thing that held him into any sort of reality, into the world at all, was the trust that he had for his sister, that he knew that she loved him and would defend him, and so she was the whole world to him, and these things were flashes that were reflected on her as in a mirror. (Gwynn and Blotner 64)

Caddy は、Benjy 以外のすべての兄弟にとってと同様に、その意味はそれぞれに異なるとしても “she was the whole world to him” なのである。つまり過去が、単なる過去の伝説ではなく、過去と現在の両方が一人の生身の女性の処女膜の中に含まれているわけであり、それをめぐって濃密な人間ドラマが繰り返される。妹 Caddy を深く愛する兄の Quentin は、妹 Caddy の体に流れる時間、そして自分の体に流れる時間を止めることはできなくても、少なくとも時間の影響を被る肉体を滅ぼすことで時間の破壊力を欺けるという幻想にすがって自殺をするし、弟の Benjy は、姉 Caddy の体に流れる時間を否定するかのようになり、永遠の3歳の知能しか持たない白痴のままであり続け、時間の経過の中で起こる彼女の変化を認識しないという形で、圧倒的な時間の破壊力に抵抗している。このように、命を賭けてまでして止めたい時間が、Caddy のエロスを持った肉体に結び付けられているため、時間の問題が、精神と肉体と悲劇性を十分に備えたドラマとして展開される。

The Sound and the Fury に始まる Faulkner の 1930 年代の作品では、Caddy と同様の魅力と破壊力を備えたヒロインが中心となっている。*Light in August* の Lena Grove, *As I Lay Dying* の Addie Bundren と娘の Dewey Dell, *Sanctuary* の Temple Drake と Ruby Lamar, *Absalom, Absalom!* の Judith Sutpen, *The Hamlet* の Eula Varner, これらのヒロインたちは、単なる個人を超えており、社会の安寧や秩序すべてを決定づける巨大なエロスの力と強烈な魅力（そして怖さ）を備えた女の精髓である。彼女たちと関わる男たちは、ヒロインに激しく惹かれながらも、性的な関係を持つことは絶対に出来ないまま、それぞれの作品の終わりで若いままで死去したり、精神病院に収容されたりして、作品世界から姿を消す。

Go Down, Moses はその真逆であり、ヒロインとなる女性が登場しない。Isaac の妻は、全部で 365 ページの小説の中の 5 ページに、それも夫 Isaac に対して、セックスしてやるからおまえが相続放棄した土地を取り返してこいと指示する売春婦的な価値観の愚かな姿を見せるだけの登場の後で、すぐに死ぬ。本論で先に言及した “Pantaloon in Black” の Mannie も小説が始まった時点で死去しており、決して Caddy に匹敵するような存在にはなり得ない。つまり、三大傑作から *Go Down, Moses* への変化は、後者が男ばかりの世界の物語になり、その分、肉体的な具象性を欠いた非常に抽象的な観念の提示になるのであろう。

Go Down, Moses の特徴は、まだ二つある。一つは、女性を核とする過去との繋がりドラマに集中していた 1930 年代の作品には見られなかった、「現実問題」への関心である。この作品で初めて、黒人が主人公の地位を得て、単なる背景ではなくなったことについてはすでに言及した。こうした黒人に関する「現実問題」を取り上げるようになったことは、自然破壊という「現実問題」へ

の関心、および20世紀初頭に起きた the Great Migration ——南部の黒人人口が大挙して北部に移住するようになった現象——の「現実問題」への関心ともつながっているのだろう。自然破壊に関して言えば、南北戦争直後から、勝者北部が主導する急激な開発と産業化がアメリカ全土で進み、戦争終結からわずか四半世紀にすぎない1890年に、国勢調査の結果、アメリカからフロンティアが消滅したという宣言が出されたことは、「アメリカの夢」そのものの崩壊にもつながる重大問題であった。“The Bear”で主人公 Isaac が重大な決意をするのが、その宣言とはほぼ同じである1888年に設定されていることはもちろん偶然ではなく、この急激すぎた北部主導の開発の破壊性と、それに付随して起こった“a deterioration of American moral values” (Trilling)⁷を強調するためである。自然破壊の問題が明確に打ち出されているのとは対照的に、作中で the Great Migration が直接言及されることはないが、黒人が南部を捨てて、北部へ去ってしまうことを南部共同体の解体の危機として Faulkner が捉えていることは確実であり、Go Down, Moses の黒人問題も、言及こそされていないが、the Great Migration を念頭に置いた南部社会解体の危機という問題になっている。

さらに、主人公の Isaac が長寿を宿命づけられていることも、男性主人公の死や発狂等で終わるこれまでの作品とは大きく異なるが、長寿に関しては、作品の解明の中で意味を見ていこう。

4

Go Down, Moses の核となる、Isaac McCaslin を主人公とする2つの狩猟物語を解明する前に、登場人物全員の存在の原点となる過去の事情に言及しておく。白人文明に毒されたインディアンの Ikkemotubbe は、権力欲に駆られ、不正なやり方で酋長の地位を篡奪し、土地を白人に売り渡し、そして白黒混血の妾に息子 Sam Fathers を産ませておきながら、その妾と我が息子を奴隷として売却するという悪行を犯している。一方、Ikkemotubbe から土地を買った白人の Carothers McCaslin も、白人の妻との間に息子——この息子のさらに息子に当たるのが、主人公の Isaac である——をもうけておきながら、黒人奴隷女 Eunice を懐妊させて混血の娘 Tomasina をもうけるが、さらに Tomasina が成長すると、実の娘と incest を犯して息子 Tomez' Turl をもうける。Tomez' Turl から発したのが、この小説に登場する Carothers の黒人系子孫である。こうした先祖の罪と汚れをどのように償うのが、神話的な物語の関心事である。

“The Old People”は1879年の Mississippi の大森林を舞台に、12歳の Isaac が、Sam Fathers に導かれて、尊い狩人の資格を獲得する物語である。Isaac はすでに10歳の時から Sam Fathers の指導のもとで、狩人としての精神と技量の両方を獲得すべく、苦行僧さながらに修行している。この物語において、森は現実の意味を超えた神話的な意味——人間文明以前の太古の楽園という意味——を持つ世界、人間が他者を奴隷にするという「文明」の汚れに汚染される以前の状態であり、従ってかつての奴隷である Sam も森の中では、尊く高貴な野性の血の持ち主として、大きな敬意を払われている。既に2年の修行を積んでいる Isaac は、ここで初めて雄の鹿を撃ち殺すのだが、それは動物の命を奪うだけではなく、奪った命に恥じない「野性の精神」を持った生き方をする義

務を負う行為である。鹿の血を額に付けられて「洗礼」を受けることは、Isaacの所属が、文明世界から太古の野性の世界に移ったことを意味しており、このことが“he [Isaac] was witnessing his own birth” (187) と、別の人格の誕生として説明する文によって示されている。そして、野性に所属する人間は、文明的な傲慢さをすべて投げ棄て、*humility and patience* だけにならねばならないし、Isaacは12歳でその義務を達成したわけである。文明世界への所属から脱した少年にとって、現在と過去を隔てる境界が消滅し、現在は過去の中に溶け込んでいく。

And as he talked about those old times and those *dead and vanished* man of another race from either that the boy knew, gradually to the boy those old times would cease to be old times and would become a part of the boy's present, not only as if they had happened yesterday but as if they were still happening, the men who walked through them actually walking in breath and air and casting an actual shadow on the earth they had not quitted. (My italics 165)

イタリックスにした部分に明らかなように、大森林は人間と動物と植物のすべてが、“*dead and vanished*”の状態から、再びよみがえる世界である。よみがえると言っても具体的なイメージは掴みにくい。大地に落ちたドングリからやがて芽が出たこと、死して埋葬された人々も、野性の*humility and patience*の精神を受け継ぐ弟子の存在と記憶を通して生き続けることを指す。このように野性の精神的遺産が受け継がれることで、死と滅びは、永続性へと逆転する。それを示すように、Isaacに殺された鹿も、死滅したのではなく永続化したことを誇示するかのよう。apparition (a dead revenant)として姿を現す。既に“Pantaloone in Black”で見た「失われた楽園」の回復祈願は、“The Old People”に至って楽園回復の希望になる。またこのような経緯によって、大森林は、人間文明の汚れと全く無縁の「太古=Eden」となる。

徹底消滅としての死が否定されているこの小説で、生も、ある種否定的な独自の意味を纏うことになる。人間社会は文明的傲慢さの汚れに持ちており、この中で生きていかねばならぬことは、すべての人間にとってendureし続けねばならない“bondage” (161,179等)であるし、野性の精神を保持する者の死は、そのbondageから解放されて、太古の永遠性の世界へと解放されることである。しかしそれは死の肯定であると同時に、人生を耐え忍ぶ忍耐の義務の発生でもある。不滅性は、野性の精神を実現していた人の記憶を受け継ぐ弟子の存在(生存)を通してしか、実現され得ないからである。Sam Fathersの記憶、荒野の記憶を受け継ぐためにも、Isaacは長寿の人生を耐える義務を負っている。1930年代のFaulknerの傑作期の作中の白人男性たちが、「短命の輝き」を放っていたとすれば、Go Down, Moses以後の作品は、人生をendureすることが重視されるようになる。傑作期においては、白人の短命の悲劇に対して、黒人のenduranceが言いたてられていたが、ここからは白人もendureし、老醜をさらすことまでしなければならなくなる。

こうして見てくれば、消滅を超越した「不滅の楽園=太古」の意味はおおよそ理解できるが、しかしそれはintangibleで、具象性を欠いた抽象概念である。そして言うまでもなく、女性はこの抽象世界——狩人だけで構成される野性の世界——から、完全に省かれている。自分の所属する世界

を、文明世界から野性の世界へ移すという Isaac の 6 年にわたる修業も、1 年のうちの 2 週間に限られるのであり、残りの 50 週余は、彼も文明世界の中で生きなければならないし、彼の物語は、2 週間だけを神聖視し、残りの 50 週を無視する内容であるともいえよう。次の “The Bear” は、“The Old People” よりも扱う時間が長く、Isaac が 10 歳から 18 歳まで続けた森の中の修業の物語と、その成果としての思索と、遺産相続拒否の決断に至る 21 歳の Isaac の物語から成り立っている。先ほど言及したことだが、Isaac が森での修業を始める 1877 年から思索の結論に至る 1888 年は、南北戦争後に、勝者である北部の主導のもとに、猛烈な自然破壊が行われた時期であり、「アメリカからフロンティアが消滅した」公式宣言が出されたという深刻な「現実問題」が、Isaac の物語の背景に存在している。

“The Bear” の特徴的な価値図式は、文明以前の狩猟時代と、人間文明以後の農耕時代に絶対差を見立てることである。狩猟時代も農耕時代も人間文明の同一の流れの中で連続している段階であり、そこに絶対差を見たてることが、アカデミックに言えば正当ではないのだが、狩猟時代を「人間が、文明に汚染されていない楽園の時代」として意味づけることは、この神話においては必要不可欠な前提条件である。文明の汚れの最たる奴隷制度も森の時代、森の空間には及ばず、“It [森の community] was of the men, not white nor black nor red men, hunters, with the will and hardiness to endure and the humility and the skill to survive” (184) であり、このホモソーシャルな男たちが飲むウィスキーも、単なるアルコール飲料のレベルを超越した “some condensation of the wild immortal spirit” (184) であり、それは “modestly and humbly” (184) に飲むお神酒である。勿論、この世界を消滅させようとする文明の巨大な力（開発）は刻一刻と迫ってきていて、人間精神を純化してくれる森の wilderness は絶滅に瀕している。農業文明が、狩猟時代と正反対の意味付けを付されていることは、“that doomed wilderness whose edges were being constantly and punily gnawed by men with plows and axes who feared it because it was wilderness” (my italics 185) を、先の引用と比べてみれば一層明確になる。

Faulkner にとって、過去から現在に至る時間は、ひとえに喪失・墮落・衰退・破滅をもたらす⁸のであり、Go Down, Moses においても、時間経過は “wreckage and destruction” (185) だけをもたらす。この時間の宿命から超然としているように見えるのが、太古の大森林の主として、森と同一の悠久性をもって生き続けていると hunters が信じている、divinity を付与され、Old Ben と名付けられた巨大な熊である。熊は、あらゆる生き物が抵抗できない時間の破壊力から超然としているがゆえに神になっている。しかし、熊と同じだけの寿命を生きてきた（と hunters が信じている）大森林が、今や急激な開発の中で蝕まれ続けており、早晚消滅するはずの現状において、大熊の死滅も近い将来の確実なこととして予測できる。しかし熊が死なねばならぬとしても、それは神格性や野性を失った衰弱死であってはならず、野性の最も猛々しい姿を示し、その記憶を受け継ぐ人間の中で、存在が永続化されるような死でなければならない。死を超越した野性の楽園に、生命の永続性があるという考えは、既に “The Old People” で打ち立てられた神話である。

“The Bear” は、まず第一に、荒野で修業を始めた少年 Isaac が、神である熊にまみえる資格を得るために、文明世界の汚れ——銃、時計、磁石、蛇よけの棒——を一つ一つ投げ棄て、 *humility and endurance* の精神を獲得する過程を描く。文明の汚濁を背負った人間は、熊の姿はおろか、足跡さえ見ることができないのだが、厳しい修行をやり抜いて文明の汚れの放棄を果たした Isaac は、熊と *face to face* で見つめ合うまでに成熟する。第二に、Old Ben に猛々しい死をもたらすのに必要な猛犬に関する物語が展開される。Sam Fathers をはじめとする狩人たちは、愛してやまない神である熊を殺すために、数年がかりで猛犬を育てて訓練をする。本心で言うならば、誰も熊を殺したくはないはずであるが、熊の野性を最大限に引き出す死を与えなければ、熊（大自然の神、太古の神）を永続化させることができないから、悲しみを押し殺して淡々と熊の殺戮の準備を整えていく。それを見守る Isaac は次のように考える。

It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun.... It was the beginning of the end of something, he didn't know what except that *he would not grieve*. He would be humble and proud that he had been found worthy to be a part of it too or even just to see it too. (My italics 216-217)

Isaac は終末の始まりを見つめながら “*would not grieve*” と言明しているが、勿論愛する熊を殺す準備が悲しくないはずがない。しかし、もし悲しみを表に出すならば、「死を超越した不滅の楽園」という神話自体を否定することになりかねないため、悲しみを断固として否定する。さらに、この猛犬の世話や訓練は、Sam Fathers の指示のもとで Boon という大男が行っていることも、重要な意味を持つ。Boon は子供の知性しかない男、“*a slave to all appetites and almost unratiocinative*” (my italics 164) で、猛犬を可愛がって育てることの先にある状況を想像する能力がない男であり、彼の視点から見える状況が作品で展開されるため、Sam や Isaac や hunters は、愛する者を殺す準備という悲哀を表現しなくて済む。つまりこの葛藤多い状況を、葛藤を省いて提示するためには、Boon の鈍感さが不可欠なのである。

熊を殺すだけのために猛犬を育て始めて3年目の秋、いよいよ熊と猛犬が対決し、熊（神）と猛犬は野性の輝きを見せつけてほぼ同時に死ぬし、それを見届けた Sam Fathers 老人もそのすぐ後に死ぬ。3つの野性の *incarnations* が、野性の猛々しさを失わずに死ぬことは、神話図式の中で「死を超越した楽園で永続化する」と意味づけられることであろう。従来 of 批評では、この「楽園」なるものが、旧南部を否定する意味のものだとしばしば言われているが、それは全く事実と逆であり、「楽園」は北部的な開発や産業化こそ否定するものの、決して旧南部そのものを否定しているのではない。このことは熊を殺す日の狩人たちを率いる Major de Spain の描写、“*when they went into the woods this morning Major de Spain led a party almost as strong, excepting some of them were not armed, as some he had led the last darkening days of '64 and '65*” (226) のように、Faulkner が、森の神たる熊の死と、旧南部の死（南北戦争での敗北）を結び付けていることでも証明される。

こうして、狩人たちは、熊（神）を、滅びが侵入しない領域へ入れて永続化させたはずであるが、

先ほどから言っているように、この領域は具体的なものではなく、狩人の記憶の中にのみ存在するきわめて抽象的な観念である。従って、熊の死後、熊の存命中と同じようなあるべき秩序が、狩人仲間の中でさえも維持されているのかどうか、非常に疑わしくなる。大熊 Old Ben がまだ生きていた時点で、Boon は、森の中で木に昇ったまま降りられなくなって怯えている小熊を、誰かが狩ることがないように一晩中見張っている (305) し、これは大切なものを守る意味ある行為になっている。しかしこの小説の最後の有名な場面で、Old Ben が死去した後、ゴムの木に登っている数十匹のリスを守ろうとする Boon の行為⁹は、そのリスたちをもパニックに陥れる、意味の蝶番が外れた行為になってしまっている。そして、熊を不滅の世界に送りこめたのか否かは、熊の死に関わった人間の倫理意識の中でのみ試されることになる。

“The Bear” の中でも飛びぬけて長く難解であるのが第 4 章——、21 歳になった Isaac が、熊の死に込められた精神を受け継ぐべく、祖父 Carothers が打ち立てた plantation の相続を拒否するに至る、抽象観念が横溢した思考と議論が繰り広げられる第 4 章——である。相続拒否の決断を下す前に、Isaac は、農場の ledger に記録された旧南部の汚濁の歴史と全人類の汚濁の歴史を関連付けて語るのだが、Isaac の歴史の語り方の特徴は本論の最初に土地私有の罪悪を題材にした部分で指摘しておいた通りである。すなわち、厳格すぎる判断基準を打ち出し、その基準で旧南部を断罪しながら、同じ基準でもって人類の歴史全般を断罪し、そのことによって旧南部固有の罪悪性を薄めるのである。「難解」と見えるこの議論も、そのような特徴を理解すれば隔々まで解けてくるのであり、Isaac の論理の概略を述べてみよう。

本来誰のものでもないはずの土地を売買し、私有化し、開発するという、文明に由来する傲慢さは、本来私有してはならない人間を、人間が私有する奴隷制度の傲慢さにも直接繋がる。旧南部において、インディアン酋長の Ikkemotubbe も、Isaac の祖父である Carothers も、傲慢さゆえに土地と奴隷に関して罪を犯してしまったが、土地私有や奴隷制は、南部のみならず人間文明の根本に存在しているものである。神は人間に対して、すべての生き物を神に代わって統率し、楽園状況を作るように命じたのに、人間は傲慢さと欲に憑かれ、土地私有や奴隷所有を始めてしまい、神の命令に背いた。古代エジプトのみならず、近世のヨーロッパ文明に至るまで途切れることなく、土地私有と共に、偽装されてはいるが奴隷制度は続いていた。そこで神は、神の国を作る最後のチャンスを与えるために、人類に新大陸アメリカを与えた。こうした新大陸に関する意味づけは、アメリカン・アダム神話（アメリカの建国神話）と同じであるため、アメリカの批評家には、Isaac の論理の特異性が見えにくいのかかもしれない。

Isaac の解釈を続けて説明する。旧大陸から来た人間——白人——は、新大陸に古い世界の悪を持ちこんでしまい、新世界を旧世界と同様に罪に汚れた状況にしてしまった。では、インディアンにアメリカを委ねて、白人が入らないままにしておくべきだったかという点、そうではなく、神はインディアンだけの世界の未来に希望を持ってなかったため（その理由は示されていないが、Ikkemotubbe だけがインディアンのすべてを代表している）と見なす観点に Isaac が立って語って

いるからであろう), 白人を入れるしかなかった。新大陸に白人が持ちこんだ悪——奴隷制度, 土地私有制度のみならず, すべての文明的な傲慢さを指す——は, “only the white man’s blood was available and capable to raise the white man’s curse” (248) であるとして, あくまでも白人移住と白人による支配が正当化される。万能である神は, Carothers たち白人移住者が, 文明に由来する傲慢さの罪を犯すことをはじめから見通していたが, Carothers の子孫の中に先祖の罪を償うものが生まれてくることも知っていたから, 敢えて Carothers (及び彼に象徴される, 支配階級の白人) に南部の土地を与えた。また南部人は罪の一端を, 南北戦争という絶大な suffering によって償っているし, その苦難を引き受けられたのは, 南部の人々が南部の土地をこよなく愛していたからである。これが, Isaac が論述する歴史解釈である。この中で「神は, 子孫の中に, 先祖の罪を償うものが生まれてくることを予知していたから, 傲慢な白人に南部の土地を与えた」という白人の旧南部社会を正当化する論理が, 黒人に対する償いの最大動機となるが, この詳細は後に回す。

このように, 南部固有の問題の断罪から始まったはずの議論は, 人間文明に普遍的である悪の議論に転化され, 南部の問題の固有性は薄められていく。黒人問題に関する議論も, これとほぼ同じ論理的な筋道を通る。土地を売買するという「許されない悪行」を犯した Ikkemotubbe と Carothers が, ともに黒人の女と我が子に対して, 同様に「許されざる悪行」を犯したことは既に述べてある。しかし黒人女と我が子に対するこの2人の悪行は, 旧約聖書の Abraham と暗黙のうちに重ね合わせることによって, 滅菌された抽象観念に収斂していく。聖書の Abraham は人類の始祖 (progenitor) であり, 妻 Sarah に子が生まれなかったため, 外国人の召使い女 Hagar を第二夫人にして, 息子 Ishmael をもうけるが, やがて本妻に息子 Isaac が生まれると, Hagar と Ishmael を砂漠に追放した。Ikkemotubbe と Carothers の, それぞれの黒人女と我が子に対する非道な行いは, 明らかに Abraham をなぞっており, 彼らは「南部版 Abraham」という南部社会の始祖として作られた像である。Abraham の罪が起こった後も, 子孫である人類は存続しているのと同様に, 南部版 Abrahams の罪も, 子孫の存在意義を否定するものではないし, 始祖の罪は子孫による償いで滅却されることになる。このようにして, 特定の個人が犯した罪, 特定の階級が犯した罪は, 「人間文明の罪」という抽象観念に収斂されていってしまう。この小説で, Carothers と Ikkemotubbe が直接の登場人物になることはなく, 子孫の記憶の中だけで提示されることが, 彼らの生身性——存在のみならず罪の生身性——の希薄さ, 抽象性を暗示していると言えよう。

Carothers の incest を論じる前に, 「作者 Faulkner はなぜ, 黒人奴隷女の体を性的満足のために使用して, 混血の子供を産ませた」だけでとどめずに, さらに, その我が娘との incest などという, なかなかあり得ないような状況をわざわざ小説に持ち込んだのだろうかについて述べよう。それは, Carothers と Ikkemotubbe を, Abraham とつなげる意図があったからであり, 単に「異なる民族の女に混血の子供を産ませた」ことに加え, 母子の砂漠への追放 (Abraham) と, 奴隷として売却 (Ikkemotubbe) に匹敵する状況として, another turn of the screw としての incest が持ちこまれていると思われる。

Carothers の incest に関しては、読者は Isaac の語りでしか情報を得ることができないのだが、その語りは incest をありふれた恋愛沙汰に転化するものである。旧南部の plantation で、白人農場主が黒人奴隷女を性欲の処理に利用して子供を産ませることは、かなり頻繁に生じていた「ありふれた事実」であった。しかし仮にそれを「ありふれた事実」として一応受け止めたとしても、もしそれに加えて、我が娘を父親が孕ませるといふ incest が起きていたなら、事態の深刻さは計り知れなかったはずであるが、Isaac の語りは、これを通常の恋愛沙汰に還元してしまう。Carothers の側にも “But there must have been love.... Some sort of love, Even what he would have called love” (258) と、奴隷女に対する愛情があり、そして奴隷女 Eunice も Carothers を恋人と感じていたに違いない、という根拠はない想定に立って、Isaac は語る。彼によれば、Carothers と黒人奴隷女 Eunice との関係は相思相愛の「恋愛」であり、そして妊娠した Eunice を男の黒人奴隷の妻として「払い下げた」後も、Eunice の Carothers に対する愛情は変わらず、やもめになって寂しくなった Carothers を慰めるために、Carothers との間にもうけた娘 Tomasina を屋敷へ女中として差し出すと、今度は Carothers が Tomasina まで妊娠させてしまう。我が恋人と我が娘の性関係を知った Eunice は、入水自殺をする。Isaac の語りを見てみよう。

...he [Isaac] seemed to see her [Eunice] actually walking into the icy creek on that Christmas day six months before her daughter's and her lover's (*Her first lover's*, he thought. *Her first*) child was born, solitary, inflexible, griefless, ceremonial, in formal and succinct repudiation of grief and despair who had already had to repudiate belief and despair. (Italics original 259) .

Isaac の語りでは、Eunice は最初から最後まで Carothers に恋愛感情しか抱いておらず、私の考えに立てば当然に感じてよいはずの、母親として娘を守ってやるができなかった後悔と痛み、実の娘を孕ませる Carothers の非人道性への憤りの類の感情を、Eunice が抱く気配は皆無である。上記の引用に見られる謙虚な自己放棄として自殺も、読んでみると、「自分が愛している男に若い恋人ができて、見捨てられた年上の方の女が、愛情故に自ら身を引く」ごときものにしか読めない。これを敷衍して言うなら、incest があつたと語られてはいるものの、その感情的な実態がない——両方の人種の間にも当然起こりうる対立や恨みも、引き裂かれるような痛みもなく、incest という事態が持つはずの毒性が滅菌され、具象性を欠いた抽象になっているのである。そしてこの作品の incest は、「南部の白人も南部の黒人も同一の始祖によって結ばれた運命共同体に中にあるのであって、黒人は白人に贖罪の機会を与えるために、南部に留まり続けるべきだ」というような意味付けだけに収斂していく。白人によるかつての南部支配が正当だと意味づけるために、白人が黒人をそばにとどめて贖罪をしなければならぬわけで、極端な言い方をすれば、黒人は白人に贖罪の機会を与えるために南部に留まり続けるべき、ということになる。この意味付けを示すものであるだろうが、南部を離れた黒人のその後は、Fonsiba, “Delta Autumn” に登場する、Tennie's Jim の子孫である娘、“Go Down, Moses”において、Chicago で死刑になる Butch 等々の全員が、新たな人生の可能性などを掴むことから完全に隔てられた姿で描かれている。

Isaac は、南部の歴史的な悪行連鎖を断ち切り、償いを具体化するために、文明の汚れにまみれた先祖伝来の plantation の相続を拒否し、キリストと同じ無一文の大工になって、“I am free” (268) と、南部の呪いから解き放たれたと宣言する。しかしこれで先祖の罪に対する彼の贖罪が完結したわけではなく、常に黒人との運命共同体性を確認し続けねばならない。だから Isaac の “I am free” という主張は、逆説的に聞こえるかもしれないが、南部運命共同体のしがらみに自ら進んで縛られることでもあり、彼は自由の宣言をするとほぼ同じくして、“no man is ever free and probably could not bear it if he were [free]” (269) だと言う。この矛盾して見える 2 つの言葉は、同じ意味を指しているのである。

以上、この章の論述から、*Go Down, Moses* を執筆している Faulkner が、1930 年代の傑作期とはずいぶん異なる形で、南部の歴史を振り返り、それを断罪するような見かけのもので、南部を正当化していること、そうしなければならぬ必要性を持つようになったことは確実であるが、それについては、次の、神話以外の物語群との関わりをみたくうえで、再度考えよう。

5

大森林の狩猟を舞台にした、非常に抽象的な神話物語は、*Go Down, Moses* の真ん中に位置しているのだが、この抽象的な神話や incest と深く繋がっているのが、同一の progenitor である Carothers の白人子孫と黒人子孫をめぐる 4 つの物語である。まず冒頭に配置された “Was” は、Carothers の白人系子孫と黒人系子孫の両方が——白人側は渋々、黒人側は大喜びで——同時に結婚をして、それぞれの夫婦がさらに子孫を生み出していく物語である。舞台となっている時は南北戦争勃発寸前の 1859 年、つまり旧南部社会崩壊の直前である。Carothers が死去して久しいこの時点で、Carothers の双子の息子 Buck と Buddy は共に独身のまま 60 歳を迎えており、父の、また過去の南部の悪業を自分たちの代で断ち切る決意であり、黒人奴隷を白人用の館に住ませ、自分たちは丸太小屋に暮らすなどして贖罪をし、南部の滅びと歩調を合わせて自分の家系も滅ぼそうとする生き方を貫いている。しかしこの人生設計に狂いが生じ、滑稽な追跡ゲームという Tall tale の物語を経て、結婚せざるを得なくなる。

Buck と Buddy の双子の老人のもとに、亡き父 Carothers が混血の自分の娘に産ませた Tomey's Turl と呼ばれる男の奴隷——彼らの腹違いの弟でもある——がいる。Tomey's Turl は several hours horse-ride の距離にある隣の農場の奴隷女 Tennie にぞっこんであり、彼女に会いたいために、毎年 2 回ほど正装してラバに乗り、勝手に出ていく。Buck と Buddy は実は奴隷を放棄したいと思っているので、できることなら勝手に出て行った Tomey's Turl も放っておきたいのだが、それができず、追いかけて連れ戻さねばならない深刻な理由がある。というのは、隣の農場の歳をくった娘の Sophonsiba が Buck との結婚のチャンスを狙っているため、放っておけば彼女が Tomey's Turl を連れ戻すことを口実にやってきて何日も居座り、結婚攻撃を繰り返すので、結婚の危機を避けるために、双子の老人は放っておきたい Tomey's Turl を取返して追跡しなければならない。ここで

は、Tennie を追いかける Tomey's Turl を追いかける Buck を追いかける Sophonsiba のドタバタ劇が展開され、そしてこの全員の去就を賭けるポーカーが行われる。追跡や賭けの的になっているのは、黒人ばかりではなく、白人の Buck と Sophonsiba も同様であり、頻繁に主張される「非道な奴隷狩り」というような説¹⁰ は多くの事実を見逃している。Cleanth Brooks が 47 年も前に指摘しているように、これは “no Uncle-Tom's-Cabin-style pursuit of a Eliza” (246) である。つまり Buck は自分の結婚を回避するために、Tomey's Turl の結婚も阻止しなければならず、そのために連れ戻そうと追跡するにすぎない。逃亡した日のうちに Tomey's Turl を捕まえられなくて、隣の農場の館に一泊した Buck は、間違えて Sophonsiba の寝室のベッドに足を踏み入れてしまい (Guy de Maupassant, “Ma Femme” にも見られる、艶笑譚的な民話の定型)、自分の結婚と奴隷の引き取りの両方を賭けてポーカーをしなければならなくなり、Buck が負け、その Buck を救い出そうとはせ参じた Buddy までも負けて、必要のない奴隷のみならず、望みもしない女を娶らねばならなくなる。このドタバタ劇を通じて、白人の夫婦 (Buck と Sophonsiba) と黒人の夫婦 (Tomey's Turl と Tennie) が同時に成立するし、この 2 組の夫婦の子供たちが、同一の先祖に結ばれた南部運命共同体のメンバーということになる。そして何といても “Was” という短編を面白いドラマにしている最大の力は、どちらの農場主も相手側に押し付けたがっている、売れ残り女の Sophonsiba の去就である。結局は Sophonsiba と Tomey's Turl の結婚願望だけが実現するのが、何とも滑稽である。

この Sophonsiba が産んだ息子が Isaac である。一方 Tomey's Turl と Tennie の夫妻の 6 人の子供のうち、3 人が大人になるまで生き延びるのだが、この 3 人に対する Isaac の反応は不可解と思えるほどに、思いつめた深刻さを呈している。Carothers の孫であるこの 3 人の黒人系子孫には、一人 1000 ドルの遺産が成人の暁に与えられることになっており、これが白人側の子孫による先祖 Carothers の悪行への償いなのである。しかし 3 人のうちの 2 人 Tennie's Jim と Fonsiba は、成人しさえすれば無条件でくれる巨額の遺産を受け取ることなく、むしろそこから逃げるように、それぞれ別々に南部を捨てて出奔する。そして Isaac は出奔した 2 人を、それぞれテネシーとアーカンソーまで何日もかけて追跡して 1000 ドルを無理矢理にも受け取らせようと躍起になる。Isaac の行為の動機になっているのは、“The Bear” でたどり着いた旧南部白人の正当化——子孫が償いをすることを神が見越していたから、傲慢な白人に南部の土地を与えた、という旧南部社会の正当化の神意解釈——であり、黒人が南部を捨てたり、償いの受け取りを拒否したりすることは、神話の歴史観の論理に立てば、白人の正当化を崩壊させることになるわけであり、それを回避するためにも、出奔した 2 人を追いかけてねばならない。Isaac は、Tennie's Jim は見失って空しく戻るしかないが、北部出身の黒人と結婚して故郷を捨てた 17 歳の黒人娘 Fonsiba には追い付くことができる。この北部出身の黒人は、Isaac からいかなる償いも金銭も断固として受け取ろうとしない男、南部的な価値観をすべて否定し、拒絶する男であるが、この無欲性こそ、神話の論理に立てば許し難い態度になるわけであり、Isaac の視点を通じて、無欲な男が、無欲さと正反対の極悪的な意味付け “that

rank stink of baseless and imbecile delusion, that boundless *rapacity* and folly, of the carpetbagger followers of victorious armies” (my italics 266) を、論理を逸脱して付されることになる。

この2人兄妹の欠落を埋めるのが、自らの意思でこの地に留まる弟 Lucas であり、Lucas はこの小説でも、さらに *Intruder in the Dust* (1948) でも、「賢者」の役を与えられることになる¹¹。カッコつきの「賢者」としたのは、彼が知性においても抜け目なさにおいても人生知においても卓越していることは明らかだが、黒人にしては白人化され過ぎている部分があり、それは黒人から見たらおそらく「賢者」には似つかわしくない、嫌な特質と見えるかもしれないからである。この Lucas は黒人の血が混じる以上、黒人として分類される人間であるが、白人の Carothers が黒人の Eunice や Tomasina に対して行なった非道を批判する気配は皆無で、それどころか、自分の誇りの拠り所として Carothers を捉えている。つまり、Lucas においても、incest は実質的な意味をほぼ失って、白人と黒人の運命共同体の意味の方だけに流れる。

Lucas は、白人性と黒人性の両方を持つ「賢者」である。白人的である Lucas の容貌は、Carothers に酷似しており (68—69, 114 等)、さらに “a composite of a whole generation of fierce and undefeated young Confederate soldiers” (114) でもあると言い、まさに旧南部社会の顔そのものである。さらに Lucas は、白人男性特有の形の誇りと自我不安を抱えており、親戚である白人農場主の Zack と、男対男の決闘——*Light in August* で精神的には男である Joanna と Joe Christmas が、男らしさを賭けて行う決闘と全く同一の決闘——を行なうことで、誇りと男の自我を取り戻そうとしている。同時に彼は黒人性も持つ。滅びに向かう時間がテーマになっている Yoknapatawpha 世界では、白人の男、とりわけ名門の家の白人男は、滅びと歩調を合わせるかのように、独身や、やもめを貫いたり、夫婦の不仲が大半を占めるといった特徴があるが、黒人の Lucas は、女性との関係に怯える必要がなく、妻との間に緊密な絆を結んでいる。その絆を意味するのが、2番目に配置された物語 “The Fire and the Hearth” の題名——妻との絆を象徴する暖炉の火——であり、そしてこの物語の題材は宝探しである。

この地に留まる生き方を選んだ Lucas は相続した 3000 ドルの遺産を銀行に預金してあり、自作農としての農地も持ちながら、親戚でもある白人の農場主 Roth (かつて決闘した Zack の息子) の「密造酒ビジネスに関わってはならぬ」という高飛車な禁止命令に逆らうことに意味を見出しているのだろうが、密造酒を製造販売している。しかし密造酒ビジネスに関わるトラブルを処理するために、インディアンの塚を掘っていたある晩、“the old earth, perhaps the old ancestors themselves” (38) が彼の頭に落ちてきて、その中から1枚の金貨が出てくる、というのが、“The Fire and the Hearth” の発端である。彼は密造酒ビジネスをやめて、旧南部の埋蔵金探しを始める。その準備段階として、黒人である彼を見下している欲張りの白人セールスマンと Tall tale のような知恵比べをして一方的に勝ち、無料で金属探知機を入手し、それを使って旧南部時代の埋蔵金を探している。Lucas が探しているのは、金そのものではなく、「過去にあった価値あるもの、今は埋められているものを掘りだそう」、文字通りの “the old earth, the old ancestors” を見つけようと

する探求であり、Isaacの原初の楽園の探求と同類のものである¹²。この宝探しの探究も、妻Mollyの捨て身の反対態度の表明に従って、断念されることになる。Mollyは夫Lucasが宝探しをやめないなら離婚すると言い、その決意を体を張って示すので、Lucasは老妻のために宝探しをきっぱり諦める。しかし、この断念によって、過去に価値あるものがあつた、ということ自体が否定されているのではない。Mollyは夫の宝探しが空しい愚行だとは思っておらず、掘り当ててしまうことが恐ろしいと言っているわけで、夫と妻の両方とも、過去に価値あるものがあつたことを否定するのではなく、むしろその埋蔵金（過去の宝）の幻想を相互に強めあっているわけである。

この後に、*Go Down, Moses*の中核をなす少年Isaacを主人公とする2つの狩猟神話物語が展開される。そしてそれが終わった後、小説は神話を離れて、いきなり現在（1940年）の現実を舞台にした“Delta Autumn”になる。直前の“The Bear”の最終場面では18歳だったIsaacは、ここでは一気に73歳の老人になっており、老人となったIsaacが狩猟仲間とともに、わずかに残った森に狩りに行く物語である。既に深く浸食されてしまった森の中で、Isaacは森が育むhumility and patienceの精神について語るが、その効力や継承は甚だ心もとない。Carothersの白人系子孫で、現在の農場主であるRothと性関係を持ち、彼の息子を産んだという若い女性が赤ん坊を抱いて登場するが、Rothは彼女と会うことを拒否して、金銭のみをIsaacにことづける。もともと結婚の約束をしたわけではなく、後腐れのない短期間の性関係だということ、金銭の支払いだけするというのに、双方が合意して始まった仲であり、女は今になって男の優しい言葉が欲しくて森のキャンプまで追いかけてくるが、男は当初の約束を撤回する意思がないことを表明している。Isaac老人にしか会えない女は、Isaacが農場相続を拒否したために、親戚であるRothの一族が農場を相続することになり、土地の相続によってRothの人格が駄目になったと言ってIsaacを非難する。さらにIsaacとこの女が話しているうちに、Rothが知らない女の重大な秘密——彼女は、かつて南部から姿を消した黒人系子孫のTennie's Jimの曾孫にあたり、白人と見える彼女も「黒人」であること——が判明する。つまりRothとこの女が結婚するなら、当時は厳しく禁じられていたmiscegenationを犯すことになるわけであるが、Rothはその事実を知らない。その事実を知ったIsaacが、黒人男性との結婚を勧めると、女は“Old man, have you lived so long and forgotten so much that you don't remember anything you ever knew or felt or even heard about love?” (346)と毒づいて去る。私は多くの批評家が言いたてているような、この若い女性を「愛を知った女」として安易に肯定することはできない。この“Delta Autumn”の意味を私なりに意味づけてみれば、この女の曾祖父であるTennie's Jimを南部社会にとどめておけなかった、贖罪できなかったという過去の失敗が、今やさらなる混迷と悲劇をもたらしている、と読める。

最後の短い“Go Down, Moses”については、本論冒頭で少し言及した。凶暴な犯罪者である黒人の少年を、農場主Rothが農場から追い出したことを、少年の祖母のMollieは強く非難している。この物語のMollieと、“The Fire and the Hearth”のMolly（名前の綴りが2つの物語で違う）とは、一応同じ人間であるはずだが、そうすると生じる矛盾は、今は問わないことにする。さて、26歳

の生涯のほとんどにおいて凶暴な犯罪しかやってこなかった黒人の若者、当初から矯正不能な、自他の痛みを理解できない、人間精神を喪失したこの彼を、農場主 Roth がはるか以前に農場から退去させたことを、祖母は今になって「孫を奴隷として売ってしまった」と筋の通らない非難をしているのだが——孫息子が農場から追い出されたことに関して、Mollie が第一に問うべきであったのは、自分の養育責任であるはずなのだが、それは一切問われず、非難は一方的に農場主 Roth に向けられる——、作者 Faulkner も明らかにこの老婆を支持する立場に立ってこの物語を書いている。しかし Faulkner が黒人老婆 Mollie を支持するのは、「マイノリティ」「女性」「弱者」に自動的に正義があると言いたてる、現在の political correctness 批評が言っているのとは全く別の理由である。その理由とは、すでに何回か繰り返してきたように、“The Bear” 第4章で Isaac が掴んだ歴史認識、すなわち「神は、子孫がその償いをするを見通していたので、Carothers のような文明に由来する傲慢さを持つ白人に南部の土地を与えた」という、旧南部社会の存在を正当化する神学、神意なのである。この神学によれば、黒人は白人の償いを受けねばならず、白人と黒人は、始祖を同じくする運命共同体として緊密に結ばれていなくてはならぬことになる。つまり、旧南部社会の正当性を守るためにも、Carothers の白人子孫である農場主 Roth は、たとえいかに矯正不能な凶暴な若者であっても、この黒人を共同体の外に追い出すことはしてはならなかった。それは旧南部社会の正当性を崩す行為になるからである。

Chicago で、警官殺しを犯して死刑になったこの黒人の若者に関して、こうした秘められた「神意」を理解しない町の弁護士や新聞社主は、不名誉な死に方をした恥辱多い若者を北部で埋葬し、老婆にはほとぼりが冷めた頃に婉曲に死の事実だけを伝えようとするが、老婆は、いかに恥多い人間であれ、身内は故郷に戻さなければならないと主張し、一文無しの老婆がその主張を貫くことで町の人々も寄付をせざるを得ず、孫の亡骸は立派な棺に入れられて、おまけに花に飾られて、故郷の農場に戻ってくる。このように、祖母 Mollie の一方的な言い分がそのまま通り、孫息子は、生きた体ならぬ亡骸となってではあるが、再び南部運命共同体の世界の中に納められることになる。Go Down, Moses の中のたった4%にしか過ぎない短い物語 “Go Down, Moses” が、小説全体と同じ題名を持たせられていることに疑問を抱く批評家は何人もいるが、それは旧南部社会を正当化する神学が、この物語で最も劇的に試されているからである。

1つの長編小説である Go Down, Moses の、中心となる “The Old People” と “The Bear” で打ち出される、神話的な歴史解釈や incest の意味付けと、その2つの物語を取り巻く黒人の物語とは一体不可分に繋がっており、その両方を明確に理解しない限り、黒人の物語の意味も理解できるはずがない。しかし、現在まで、作品全体を支配している歴史と incest に関する抽象観念をきちんと解明した論文も、またその観念が黒人の物語の意味にもそっくり繋がっていることを解き明かした論文も、私が知る限り一つもない。それどころか、昨今の論文は、作品の狭い一つの局面だけを扱うものが圧倒的に多く——このことは論文の題名を見るだけでも明白である——、従って作品全体を繋いでいる意味など考慮することさえなく、作品の一部分の例えば「人種問題」「ジェンダー

問題」「経済問題」だけをとりあげ、そこに *political correctness* や *theory* の尺度を当てはめる説明をすることばかりが横行し続けている。「作品の全体の意味を把握しない限り、部分の意味も理解できるはずがない」というのが *Faulkner* 作品に限らず、すべての文学研究に関する私の一貫した信念であるが、今の文学研究界では「作品全体の意味」の存在そのものを否定してかかることが流行りなのであるから、現在の大半の批評は全体の意味を掴もうとする努力を当初から放棄しているし、これこそが学問的態度なのだとする大いなる勘違いが文学研究の世界を支配している。これがいかに愚かな思い込みであるかを示すには、実に基本的なこと——作品の限定された意味は必ず存在するし、そうした限定された意味がなければ、作者は何も言わなかったことと同じだという自明の理——を思い出せばよいのである。

6

Go Down, Moses において *Faulkner* が旧南部社会の正当化を行なっている、ということの本論で繰り返し指摘してきた。私は、旧南部社会が、*Toni Morrison* が *Beloved* で描いているような地獄状況だけではなかっただろうと思うし、また、人間が自分の自我の核となる出身母体の社会と文化に執着したり、それを肯定したりすることは、きわめて当然なことだと考える人間であるので、旧南部社会を肯定している姿勢だけを持って、批判することはない。しかし、土地私有や文明的傲慢さに関する厳しすぎる基準を持ちだして、旧南部社会を批判すると見せかけて、実はその論理で全人間文明社会を告発し、旧南部の問題を薄めるというやり方、さらにそこに神を持ち出してくる論理に、キリスト教徒ではない私は多大な違和感を覚える。これは、小説の中でまともに取り組むことは甚だ難しい問題である。例えば、「*Native American* が長年暮らしていたアメリカという地に、白人が入りこんできて、*Native American* の権利や幸福を踏みにじる *prodigious* な破壊をもたらしたこと」は事実であるが、さりとて今更 *Columbus* のアメリカ大陸発見以来の歴史全部をなかつたこととして抹消することなど出来ようもない。その両者の間でバランスをとったヴィジョンが必要であるが、この小説のようにキリスト教だけの神の「神意」を持ちだして、「アメリカをインディアンにゆだねて置く未来に、神は希望を見出せなかったので、白人にアメリカの土地を与えた」と強弁する論理や、「白人の罪の呪いは白人の血でしか購えないから、白人に引き続き南部の支配権を与えた」とか、「旧南部の農場主階級が、文明の傲慢さをまき散らし、奴隷に非道なことを行なっていたとしても、子孫が償いをするをはっきりと見通していた神は、その白人たちに土地と支配権を与えた」とかいう説明は、生々しく打ち出されてみると、あまりに白人だけに一方的に都合が良い話であることが、見え見えになってしまう。

ここまで強引な形で旧南部を正当化しなければならない必要に、この時代の *Faulkner* が迫られるようになっていたのだろう。彼が作家として出発した 1920 年代から、*Go Down, Moses* を出版する 1942 年までに、彼を取り巻く状況は大きく変わっている。第一次世界大戦後の 1920 年代の好景気は雲散霧消し、*the Great Depression*、さらには第二次世界大戦が起こり、それまで拘泥してい

た「南部の視点」だけでは不足なのだという感覚を持ち始めたのだろう。具体的にいえば、*Flags in the Dust*において、第一次大戦でアメリカ政府から勲章をもらった南部の若者に対して、父親が「北軍の政府から勲章をもらうなんて、許せない」と息巻く状況がまだ存在していたが、*Go Down, Moses*の“Delta Autumn”では、Hitlerを相手とした戦争であるという話が出され、もはやUnion vs Confederacyの感情や価値観で対応できる状況ではなくなっているように、変化を見せている。Patrick McHughの記述によれば、

In the Thirties, the rural-agrarian farming life in the South was fast disappearing. The failing economics of sharecropping and the day wages made available in part by federal money distributed through the WPA led to mass migration from the farms to the towns and cities. (McHugh 64)

である。Faulkner自身も1930年代後半から40年代に、小説では食べていけないために毎年数カ月はHollywoodへシナリオを書く出稼ぎをするようになり、南部の外の世界も否応なく経験するようになったこと、および南部の綿花農業に関する政策が変わったり、人種問題に対する外部の批判が高まってきたりして、南部が従来のままでは存続できないのではないかという危惧感を抱くようになったことは、たやすく推測できる。南北戦争で「殺された」旧南部にこだわり、いわゆるNew Southを紛い物として歯牙にもかけなかったFaulknerだったが、この頃から、不快ではあるがもはやNew Southしか残されていないという感覚が強まり、またそれにつれて、1942年には、以前には見られなかった“articulate in the national voice” (*Selected Letters* 166) という態度を公言するようになる。南部の人種問題の病弊を描く必要性も自覚してくるが（この社会変革的な関心が*Intruder in the Dust*を生み出す）、それをする前に、*Go Down, Moses*において、南部の歴史を振り返り、かつ「神意」を持ち出すまでしていったんは南部の存在をアメリカの中に正当な一部として意味づける必要があった。南北戦争の敗北から75年余を経た1940年代には、誇りを守ったままの南部はアメリカの現実、世界の現実からどんどん取り残されていたし、南部の存在はアメリカの中では「旧弊な悪」として否定的に意味づけられるばかりだったから、そこで南部の存在の正当さを確認する必要がまずあったと言えよう。それにしても、アメリカが自然発生的に生まれた国家ではなく、宗教的なイデオロギーによって人工的に作られた国であることを、この小説は今更ながらに思い起こさせるし、そしてこの小説でIsaacが語る神話に見受けられる、自分に都合が良い「神意」の利用のかなりの部分は、Isaac一人のものではなく、アメリカという人工国家が抱え続けている特質でもある。

いずれにせよ、*Go Down, Moses*の時点で、Faulknerは1930年代の傑作時代を特徴づけていた処女膜幻想から離れている。これを「発展」と見ることもできるが、すでに築き上げた豊饒を生み出す母体を放棄して、過剰な抽象に進んでいく、魅力を薄めて行く過程であると私は感じている。傑作時代の処女膜幻想においては——若い魅力的な女性の処女膜や貞操に、安寧と清らかな社会秩序を結び付けるといった女のイメージが、sexismに基づいていることを認めたくて——、人物たちが執着してやまない若い女性の処女膜の中に、過去と現在の時間の連続、過去の清らかさ、アイ

デンティティの根拠、濃密な人間関係と濃厚なエロス、性的関係の不可能性のアイロニーなどすべてが凝縮されているわけであり、「過去の南部の存在の正当性」もその中に輪郭ははっきりしないが確実にこめられていたのだから、わざわざ無理な論理を駆使して神話を打ち出す必要などなかった。つまりそこにおいては、処女膜幻想を負う、エロスの力を持つ若い女性の肉体という具象と、そこに込めた抽象的な意味のバランスが絶妙に取れていた。しかし、そのもととなる具象が外されると、バランスは一気に抽象観念の方に傾くことになってしまう。以後の作品において、処女膜幻想を背負う女性はまったく登場しなくなる。こうした Faulkner の抽象化の深まりを象徴するのが、現在版キリストを主人公にした失敗に終わった大作 *A Fable* (1954) である。

このように、処女膜幻想は、その有無という形で、Faulkner の全作品を二分できるほどに重大な彼の独自の特徴である。しかし、Faulkner が処女膜幻想から離れ、抽象に傾き始めたのは、*Go Down, Moses* 以前の *The Wild Palms* (1939) においてすでに始まりかけていた。エロスの喪失、処女の存在の喪失、肉体（具象）を失った「愛」のイデオロギー（抽象）ばかりが肥大していくこの脱 Yoknapatawpha 物語を次に分析して、Faulkner の転機の意味をさらに解明し、その後で、Faulkner の人生最後の作品 *The Reivers* (1962) において、再び処女膜幻想のパターンに戻っている意味を考え、長年にわたった私の Faulkner 研究を締めくくりたい。

[注]

- 1950年代に Faulkner が受けた多くのインタビューや質疑応答で、南部の政治問題に関する質問が多数出されていることを見よ。
- テキストは William Faulkner, *Go Down, Moses*, New York: Vintage Books, 1990 を使用する。
- この種の批評は多いが、最近の2つの例をあげておくと、H. Collin Messer, "Exhausted Voices: The Inevitable Impoverishment of Faulkner's 'Garrulous and Facile' Language" *Southern Literary Journal*, volume xxxix, number I, fall 2006 pp.4-10, Tracy Bealer, "Just Git the Womenfolks To Working At It: The Construction of Black Masculinity in *Go Down, Moses*, *ATENEA* Vol. XXXIII NUM. 1, 2008, pp. 107-130.
- "Go Down, Moses" に登場する老婆 Mollie は、"The Fire and the Hearth" に登場する Molly (何人かの批評家も気づいているように、綴りも違っている) は、一応同一人物であるはずだが、"The Fire" の方に孫を引き取って育てたという話は全くなく、また "The Fire" の身に登場する Molly の夫 Lucas ほどの shrewd な男が、このような孫を容認していたとは到底考えられず、2つの物語は矛盾している。
- 「失楽園」モチーフは、"Pantaloons in Black," "The Old People," "The Bear" の他にも、人種の違いを意識することなく仲良しでいられた幼い白人と黒人の男の子が、やがて人種の違いの認識を境に楽園喪失をするエピソードにも繰り返されている。
- Mizuho Terasawa, *The Rape of the Nation and the Hymen Fantasy: Japan's Modernity, the American South, and Faulkner* (Lanham Boulder New York Toronto Oxford: University Press of America, 2003)
- Lionel Trilling は論文 "The Greatness of *Huckleberry Finn*" において、南北戦争後のアメリカ全般の混乱状況と精神性の墮落を、多くの同時代の文人の証言を引きながら、以下のように述べている。"The Civil War and the development of the railroads ended the great days when the river was the central artery of the nation. No contrast could be more moving than that between the hot, turbulent energy of the river life of the first part of *Life on the Mississippi* and the melancholy reminiscence of the second part. And the war that brought the end of the rich Mississippi days also marked a change in the quality of the life in America which, to many men, consisted of a

deterioration of American moral values. It is of course a human habit to look back on the past and to find it better and more innocent time than the present. Yet in this instance there seems to be an objective basis for the judgment. We cannot disregard the testimony of men so diverse as Henry James, Walt Whitman, William Dean Howells, and Mark Twain himself, to mention but a few of the many who were in agreement on this point. All spoke of something that had gone out of American life after the war, some simplicity, some innocence, some peace.” *Adventures of Huckleberry Finn*, Norton Critical Edition, Second Edition, p. 325. 南北戦争の敗者である南部が徹底否定されるべき、というような思い込みが文芸批評界を支配していると思われるが、否定されるべき、というような決めつけはやめた方がよい。

- 8 Jean-Paul Sartre, “Time in Faulkner,” および Terasawa 前掲書を見よ。
- 9 ゴムの木の下で、分解した銃の部分を激しく叩いている Boon の行為は、リスを守ろうとしているとも、リスを自分だけが独占しようとしているとも、どちらでも読める。そのどちらであったとしても、過去の秩序の蝶番が外れた混乱を示している。
- 10 新しい例で言えば、Sarah Gleeson-White, “William Faulkner’s *Go Down, Moses*: An American Frontier Narrative” *Journal of American Studies* 43 (2009), 3. p. 405.
- 11 この Lucas Beauchamp と *Flags in the Dust* に登場する「愚かで憎めない黒人像の典型」である Simon Strother と比べれば、Lucas がこれまでの Faulkner の作品には存在しなかったタイプの、賢い黒人であることが良く分かる。
- 12 最近の論文、Sandra Lee Kleppe は Lucas を金銭欲に駆られた強欲だとしているが、本論で述べているように既に大金を持っている Lucas が関心があるのは、金銭そのものではなく、旧南部の宝を見出すことである。Sandra Lee Kleppe, “The Curse of God in Faulkner’s *Go Down, Moses*” *Literature and Theology*, Vol. 10, No. 4, December 1996, p. 363. また Thadious Davis は宝探しを、Carothers の土地獲得と同質の “egocentric human exploitation” (114) と見ているが (Arthur F. Kinney ed., *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family*, Boston, Massachusetts: G. K. Hall & Co. 1990), 私は全く逆に、「Carothers の文明的な強欲」に対抗する、古い世界の宝の探究 (“The Old People” の楽園に近いものを探している行為) と見なしている。